

日の昼やつと外食の手続が終つたので、昼食に始めて下谷桜木町の外食券食堂へ行く。店が狭いので中々の混雑だ。値段は朝食三十銭也で、おかずには味噌汁。昼食、夕食は六十銭で味噌汁の外にニシンの煮たのが付きます。御飯はドンブリに中指位の長さの芋が五切れ位に茶飲み茶碗に軽く一杯位の米で、少々驚きました。少なくとも二食食べなくては腹が減りますが、しかしさうすれば外食券がなくなってしまうから、どうしても家から芋でも出来たら送って貰って、足しに焼いて食べるより外にしようがありません。他の生徒に聞けば、腹の減つた時は二食食べて、券がなくならたら家へ帰って食べて来るのだと言ひましたが、しかし彼は群馬県で、家が近いから良いでせうが、小生は家が少々遠いから、そんな事はだめです。今日は岩男兄の所へ行かうと思ひましたが、相変らずの土砂降りで行けなかつたです。此の分では宇井さんもさわかちの所もちょっと行けないです。

今夕七時のニュースで内閣総辞職を聞きました。天気予報によれば明日になれば天気が良くなるらしいから、良くなつたら兄の所へ行かうと思つて居ります。では又、皆様によろしく。寒さに向ふ折から呉々もお体を大切に。

(今ラヂオはお好み演芸会で万才をやつて居ます。部屋は畳数は八十畳で、今日唐紙で三間に分けました。廻りには幅一間の廊下がグルリとあり、僕は真中の部屋に寝て居ます。)

草々

この手紙のように、他所に下宿できない生徒たちは倶楽部の建物

に寝泊まりして授業再開を待ったが、本格的に授業が始まったのは年が明けてからのことだらしい。外食券を持って上野駅周辺の食堂へ行けば、公園口は浮浪者の溜り場となつていて、いつも餓死者の死体のごろ／＼とちががっている。夕食の時には薄暗くなった公園内の道にびしりと立ち並ぶ女性たち(生活のために都内各地から集まつて来た人たちで、まだ専門化した街娼ではなかつた)の間を通り抜けながらの往復であつたという。

## ⑫ 戦後の出発

終戦後の十月一日、学校が再開された。当日の上野校長の式辞(本書別巻『上野直昭日記』参照)は平和国家建設へ向けて再出発する決意を促すものであつた。教師たちは敗戦と占領による世情の激変の下で、物資不足と闘いながら教育の場の再建へ向けて力を注いだ。その一人である村田良策は教頭格の立場で諸問題と取り組み、昭和二十四年七月に本校最後の校長に就任するが、彼は終戦後一年目の『アトリエ』誌上で次のように心情を吐露している。

美術教育への反省

村田良策

苦しい時代が始まつた。そして新しい日本再建に凡ゆる努力をしなければならぬ。悠々と煙草もふかしてゐるわけにゆかない。日に日にわれわれの身邊には冷酷な風が吹きまくる。花どころのさわぎではない。しかし、こゝが大事な瀬戸ぎわである。日本再建への方途をいま深重に、深重すぎるほどに考へるべきだと

思ふ。直ぐ新しい船に乗りかへる癖はやめよう。

われわれは一時呆然として歎息した。そして時のたつにつれて狼狽でだした。狂奔した。文字どほりなりふり、かまわず何かにかぢりつかうとしてゐる。日常の生活風景のことはいまはもう云ふまい。しかし一步外に出ると、「あゝこれでは」と暗い氣持や不安、そして焦燥の感にうたれることがらに出遇はない日はない。耳にしない日はない。

最近のことである。

横濱から鶴見方面にかけて澤山の進駐軍の組立宿舍が建つた。箱型のもかまぼこ屋根型のもある。ところがある日本の名ある建築請負會社の技師達が卷尺その他を持つて設計を量りに來て、よく出來てると言つて歸つたといふのだ。勿論參考の爲であらうと思ふ。一つの研究のつもりであるかも知れない。そつくり眞似して日本人の爲に建てるわけにはゆくまい。しかし參考にしる研究にしる何かその話を聞いて私は情けなかつた。獨創の缺除だ。

又一つ。

進駐軍將兵の爲の土産品店。工藝の大家達の應援出品もあるほどの立派な主意宣傳は結構であるが、ともかく戴いて歸つても米國生れの人達には使ひ道も、置き場所にも困るだらうところの品物では賣れる道理がない。「賣品の見當がつきません。安物ばかりが賣れるといふわけではありませんがね。」と店員が云ふのだ。そこで何でもかでも並べてをく。まぐれ當りをたのみにしてゐるとしか思はれない。これで國策云々と一方では論じようといふ。何と云ふ無方針、何といふ技術の濫費。そして知識の貧困。

あわてるといふことはこんなものか。ただお金もうけの爲だらうか。われわれの生活不安といふこともこの程度の不安感なら心配はいらない。とにかく店員はじめ出品者も極めて樂天的である。その日暮しの新日本文化國建設と云ふ方が當つてゐると思ふ。こんな調子で美術關係方面の建設を進めて行かれたら暗い氣持にならざるを得ない。

畏友伊原君は再建日本の美術界によせる一文を發表した。美術の行政指導の面にも周倒な考をのべてをられ、同感を以て讀んだが、本當に文化行政についても永久的な方針をこれからの日本政府は立てゝ貰ひたいと思ふ。政府をあてにするまでもなく美術界の人々が眞面目に先づ立ち上つて、協同協力すべき時だと思ふ。この意味で美術教育にたづさわつてゐる一人として最近の感想二三を記してみることにする。

上野の美術學校にも米軍進駐以來、建築技師だとか畫家だとかといつて參觀かどうかかわからないが、フラリと一人で或は二三人でやつて來た。時には仕事をたのみに來た。いろいろ考へさせられることがあり、又おかしきこともあり、國情、生活形式、生活感等のちがひから、傳統の問題、物資の豊かな國と貧しい國の美術製作上の心がまへのちがひ、或は美の感念の相異等を感じた。言葉が不十分だし、又議論したわけでもないし、専門家といつてゐてもどの程度か分らぬので、推量の程度だが教育といふ面からみても多少參考にするつもりで出問してみたことはある。種々の點で今後研究調査してみたいが必ずしも先方に學ぶべきことがらばかりだとは考へてゐない。

概して云へば米本國の専門家は別として日本畫の様式的な相異にはあまり關心を持つてゐない。どの位古いものかとは訊ねても流派の別には無關心で説明に一寸まごつく。技術に全く暗いのだ。一度相當頑固に主張した畫家があつて、彼は日本では二千年の古い歴史があるといふが自分は千五百年以前の美術があるとは信じない。あればそれは支那のものにちがひないと云ふのだ。千五百年とおさへたところは相當だが、近世以後のどの繪についても支那の美術、文化を頭においてゐるらしい。繪卷の複製を見せても、人物の服飾を指してこれだと言ふ。又佛畫の構圖に興味を持つても細い手法を説明しなければ吾々のその繪に對する讚美の氣持は通じない。精神的説明はなほ役にたたぬ。だから大まかに構圖の特色や材料を指摘するとうなづく。生徒や卒業生の日本畫の絹地紙地を一一訊ね、厚手の繪具に興味を持つが水繪具との區別がつかない。これらのことを分らせることは容易ではないが材料をつねに氣にしてきく點はさすがと思ふのである。日本の多くの人に分らせるのも容易でないばかりか、分らせることを吾々は怠けてゐた點がなくはないかと反省したことであつた。材料素材の智識なくして日本の繪の美しさはわからぬことが多いと思ふ。工藝美術についても眼にだけたよるのが日本人だ。美術の味ひ方が科學的、實證的でなく、わるく言へばモノヅサ玩賞、お上品賞美になつて居りはしないかと思ふ。

しかし、又ある日、二人の彫刻家と稱する士官が來た。持參の石膏の型を示し、これを乾漆で取つてくれと云ふ。學校のS君が造つてやると前に約束したといふ。S君がその日留守であつた

が、登校してゐても要求に應じられなかつたにちがひない。日本の漆がすぐ乾くと思つてゐるのだ。寒い乾燥した二月末だつたら、これを漆でとるには今の日本の氣候と湿度では約一月もかかるだらうと云ふと、さあ納得ゆかない。一週間にしる二週間まで待つといふ。不親切とも思ひ又材料がないのかと氣をまわさへするのだ。アメリカン・ラカアならいくらでもやるから造れといふ。そこで日本漆藝の手法、漆のちがひをとにかく話さねばならない。漆があるなら賣つてくれ、自分で造るといふ。そこで、日本の漆は素人が使ふとか、ブレイル、ブツ、ブツが出来るからよせといへば、(何といふ言葉の不自由を感じたことだつたらう)さあ又わからない。あきらめさせてかへしたのだつたが、この時にも教訓を得た。漆といふものを知らないのは彼等ばかりではない。漆藝術の製作工程おかまひなしの鑑賞と批評が日本でもありはしないか。高價なものだと言つても高價ならざるを得ぬ技術の成果をどの位の人がわきまへてゐるだらうか。美術學校工藝科に飛びこんで來る若人に、これら日本工藝技術の根底から、科學的に、そして精神的な教養をも合せて教へこむといふためには今の教育施設状態では全く心もとなひないのだ。技術修得の永い忍耐をどの美術部門に屬する若人も持ち難くなつた世の風潮に對してなげく前に、教育施設や教授法についても今後非常な工夫があると思ふ。教へる側の苦勞も一通りではあるまい。

ある兵隊は、自分はエッチャアだが、女房は彫刻家でニューヨークにアトリエを持つて今も製作してゐるといつて、木彫教室の小さな像と、大小の鑿ノミを珍らしさうにいぢりながら、さて言ふに

「自分の女房は、こんなにも大きい石に向つて穿岩機でヂャアと切り刻んでゐるから、すぐ出来上る」と。思はず一緒に笑ひ出したのだつたが、その兵隊の笑と同じ笑ひであつたかどうか。アメリカ現代の彫刻を自分は知らない。しかしドリルを女彫刻家が使つてゐるとは知らなかつた。しかしアメリカではありさうなこと考へた。自分はフトその時頭に「一刀三禮」といふ言葉を想ひ起した。そして次の瞬間、ニューヨーク灣頭のあの自由を象徴する巨大な女神像、或はニューヨークの摩天閣、そしてめまぐるしく自動車の走りまわる市街、素足にちかかに繪具を塗つて靴下代用とし、又それを裝飾とも思ふ女優さん達の流行等々を次々に想起したのであつた。この女彫刻家はどんな彫刻を造るのだらう。いろいろ考へたのだが、夫人の作品の寫眞を拜見したいとねだるわけにはゆかなかつたが、しかし今は又見たい氣持の方が一ぱいである。アメリカを知る一つのよすがとして、これは貴重な一資料かも知れない。繊細な、神経質な、或は又小利口な、又は一ひねりひねつたわが美術が、(このようなものばかりではないけれども)必ずしも世界に誇る美しさかどうか。一つの勝負を思ふ氣持がしてゐる。これはいま云ふまい。

ある日、司令部に勤めてゐるといふ平服のアメリカの紳士の訪問をうけた。いまこの美術學校に入學試験があるといふ。自分の知つてゐる親切な若い婦人が願書提出期日に提出がおくられて受験不可能になつたが、何とか便宜を考へて欲しいといふ話であつた。第一次發表の後でもあるし、とにかく一般受験者、第一次失格者の氣の毒な人達を考へ合せると、規則の上からはお拒はりせ

ざるを得ない正しいことではないと思ふからと云ふのだが、日本の教育制度はフレキシブルでない、ゆとりがないリジッド(rigid)だと云ふ。來年春まで一年待つのは長すぎる。希望ある者は早く希望をかなへてやる様な規則が正しいし、いつでも入學の機會を與へるのが教育の本筋だといふのである。お拒はりはしたのであつたが、現在の一年一回の入學試験期といふのは、ある點では、ことに美術學校の如き學校では、勉學者には不都合であるようにも考へられる。尤な話であるとは考へるのであるが、その爲には制度上改めて、一年二期に或は三期に入學試験を行ふことは不可能でないにしても、現在の官立學校で豫算關係や收容人員規定等に縛られてゐては一寸難かしい。私立などでは簡單に出来ると思ふが、このアメリカ式にフレキシブルになる方がいゝ學校とさうでない學校とがあるだらうと思ふ。これに關連することであるが、今美術學校では(どこの美術學校でもさうと思ふのだが)モデル難で全く困却し方途が見つかからない。日に二十圓も欲しいと言ふ時代になつては學校で何人もモデルをたのめない。あるアメリカの兵隊にこの點を聞いてみたところ、アメリカでは大概生徒が勝手にモデルを學校に連れてくるから不自由はないと言つてゐたが、平時ならパリあたりでもさうだつたかと聞いてゐるし、又多くは私的な、せいぜい市立とか又は財團による美術學校なら、勝手にめいめい連れて來られもし、それでよからうが、現在の官立の、そして豫算があるところで、又一方生徒の一日の生活生計が問題である現今では、ほとんど致命的モデル難従つて勉學難に陥入つてゐるわけである。お互にモデルになり合ふこと

は實行してゐても、ムードはどうする。(尤も裸體を描かなくとも勉強は出来る筈にはちがひないが。)もつと自由に授業するといったところで一足飛びには行き難い。

美術學生の製作意欲は旺盛であるとは云つても時の苦難を突破して自主的な勉學をなし遂げるといふには、現在では一方に於て材料資材難が致命的なことであるし、生徒の日々の生活の難澁さが、ややもすると感じ易い神經をいらだたせて、本腰になり切らせない。他方では、現在の生徒は多くは中等學校就學以來づつと右向け左向け式の教育に育つた不幸な人々で、現在民主主義的自由の道が示されたといつても、急に割り切れない精神の混迷が、彼等をひたむきにさせない。そして疑へば疑へることだらけで信賴すべきものを見失つてゐるかと思ふ。自分はいま之等の若い人達と共に新しい道を拓き光明を求めらるるためにつとめよう。日々何かを考へ何かを實行して一步一步踏みしめて行きたい。そして空虚な、先走つたことを言ひ又したくもない。足場のなかつた文化の結果がいまのこの業苦だ。新らしく學びとることは絶へない。そして實行に勇氣を持つことだ。

右文中の「畏友伊原君」とは元本校助教伊原宇三郎のことで、村田とはかつて共に本校改革運動を画策した間柄である。その「再建日本の美術界によせる一文」は『美術』第二巻第六号(昭和二十一年十二月)に掲載された「再建美術界に寄す」のことで、伊原は先ず、

これは戦後再建するべき日本の美術界に寄せる希望の書であり、年久しきに亘る私の情熱であり理想である。

今や日本は肇國以來の大難の渦中に在る。世界中の總ゆる主義と思想とが、奔流の如くなだれ込まうとしてゐる。國內では絶望的な諸事情の上に、解放された思想と行動、自由を超えた放恣、悲惨な相剋が隨所で渦を大きくしようとしてゐる。多年鎖國的な環境の中に育つて來た日本人が、よくこれを整理し、独自の平和文化國家を再建することは眞に容易なことではない。

と記した上で美術行政機関のあり方、指導奨励方法の再検討等について論じた。本校については次のように記し、十九年改革のように教員の入替えを以てこと足れりとするのではなく、教育内容自体の改革が必要であると主張した。

(F) 美術學校 日本に優れた作家は澤山居るが、美術教育家(特に技術指導の)が居ないので、理想的な美術學校を作ることには根本的な困難がある。臨床醫と醫學者、代議士と法學者とが違ふ様に、作家と教育家との間には本質的な相違があるが、その一方が居ない爲に日本の美術界や音楽界では作家が兼任代行して居り、格別それが不審ともされてゐない。

近年美術學校で大幅の人事入替が行はれた。改革の必要は随分前から一部に要望されてゐたが、現在の世評は毀譽褒貶様々である。問題は良い卒業生が送り出されるか否かにあるのであるから輕々に判断は出来ない。たゞ十數年其處に籍を置いた者として、

聊か希望を述べることは出来る。

一、唯一の官立美術學校に重きを加ふる爲に當代の巨匠を招くことは望ましい。明治大正の豪華陣を思へば、もつと大家を網羅しても多過ぎることはない。然し、學生に對する教育を本位にして考へれば、巨匠に多くを煩はすより、年齢も少く、學生と接觸する機會の多い中堅教官陣を十二分に充實しなければならぬが、其點では舊美術學校も非常に遺憾であつたし、現在も餘りに手薄である。

一、平凡なことであるが實力の涵養に主力を注ぐこと。これは一般の風潮かも知れないが、歐洲の學生に比べても、實力が足りないうで反對に發表慾が強過ぎる。トレーニングや教則を厭がつて、早く競技會へ出たがつたり、いきなり曲を弾きたがるピアノストが居たら滑稽だが、美術界にはそれでも専門家になれる穴がある。

又卒業生の生活のことも考へるとすれば、もつと幅の廣い技術が賦與されてもいゝ。私が參觀した佛印の官立美術學校では、總ゆる材料の驅使、總ゆる方面の用途にも役立つ技術を一通り教へてゐた。土地の事情が異ふが參考にはなると思ふ。

一、科學的な指導研究が總ゆる點で缺けてゐたので、學生の饑えは満たされることが無かつた。放任でなければ「悟り」本位であつたが、悟りはずつと上のことで、其處迄は文字と言葉で十分傳へ得ると思ふ。

一、夥しい偉れた參考品を、美術館の如く學生の身邊に置くべきで、學生はそれによつて視野を廣め、理想を高めることが出来る。

。校庭には物故教授の像より見られず、教室と廊下は師範學校の如く索莫としてゐて、藝術の香氣が學校に漂よつてゐない。せめて良い複製でもと思つたが、文庫は文庫の爲の存在であり、會計からは十圓の金も引出せなかつた。そこで愛書を犠牲にして受持の教室へだけ懸けて見たが、個人所有のものには限度があり、其十年間は油繪科以外の學生ばかりだつたので繪畫に熱がなく、張合を失つて中止したが、これは實技と美術史の教官が相談して計畫的にやると必ず効果があると思はれる。

一、裸體研究は今後恐らく問題にはなるまいと思ふが、モデル不足以外の理由で彈壓され、校内にすらその賛成者が現れたことがあつたが、研究と發表とは別個のもので、醫學の研究に解剖が必須な如く、美術の基礎的研究に人體以上のものは考へられない。

(G) 其他 外國との交換展、名作模寫(製作、蒐集、模寫の美術館、製作に派遣、外國との交換等)美術作品の著作権等々。

### ⑬ 結城素明名誉教授となる

昭和二十年六月一日、本校は十九年改革の際に辭職したもと日本画科教授結城素明に名誉教授の称号を贈つた。素明の長期に亘つて日本画科を指導し、戦後の日本画界を担う作家を育てた功績は大きい。素明と同時に辭職した森井健介は、友人としてその人物を素明が死去した際、次のように記している。

結城素明画伯の思い出

森井健介

三月廿四日結城さん急逝後、はや満中陰忌も過ぎた頃、突然本